

【その十六】ソロ目の年の行動

考えてみれば、例の一九九九年だった。テレビでは盛んに「ノセテハダマス」とかいうのの予言をやっている。七月に「アンゴラウサギ」の大王が空から降ってくるらしい。見てみたいものである。

そんなヨタ話をしている場合ではなかった。何しろ同居中の三羽のうちグリ・ガブがオスで、ソウだけがメスだったのだ。これは旧王朝時代、血で血を洗う兄弟喧嘩を起こした時の構図と同じだ。あの時は一羽のメス（妹）をめぐって、兄弟が決闘し、兄が死に弟が片脚になった。グリとガブの決闘、これは私にとって、終末予言などより重要かつ確実に悲惨な未来図と言える。

それでも六月まで、この兄弟とソウは仲良く暮らしていた。兄弟はお互いに切磋琢磨してブレイのさえずりの真似をし、たれたコードのうえで三羽並んでピョンピョンはねている。注意深く観察すると、祖父似の巨体で父に似た配色を持つたれ目、おつちよこちよいのガブが、父似の大きな目、母方からの影響によって白い差し毛がゴマ状に頭に生えたグリを、調子に乗って挑発するものの、優等生タイプの兄が相手にしないようだ。従って、小さいながらも均整のとれた体型、きれいな毛並みの桜文鳥に成長したソウをめぐる争いはなかなか起きない。しかし、動物の本能はこの仲の良い兄弟の上にも確実に影を落とし、六月も半ばに差し掛かると、いよいよ険悪な雰囲気になってきた。明らかにソウを間にはさんでけん制しだしたのだ。

兄弟を引き離すことにする。まずガブを別の鳥カゴに移す。色の濃い桜文鳥が好きな私としては、将来的にこのガブに外部から嫁を迎えて、さらに代を重ねようという構想だったのだ。

ところが一羽になったガブは大騒ぎ、一方のグリとソウはけんかを始めた。というより、グリがソウをいじめている。これは意外だった。優等生のグリがなぜ・・・とつても直接的にはブランクの所有権をめぐる争いのようだが、もともと三日早生まれで、姉貴風をふかし、女王様然とふるまっているソウに、グリと



ヒナ換羽が終わったガブ（左）、グリ（中）、ソウ（右）

しては含むところがあつたらしい。翌日になつても変わらないので、グリとガブを交代させる。ガブは大喜びでソウにかしづきベタベタしている。この組み合わせが正解のようだ。

考えてみれば、ソウとグリ・ガブは結構血統的に遠い。兄弟にとつてソウは、祖母の腹違いの妹となる。つまり大叔母。大叔母と同じ年齢というのは、人間に置き換えるかわけがわからないが、よつするに両者共通の祖先はヘイスケだけ。子供が生まれると、ヘイスケが祖父であり曾々祖父でもあることになってしまつが、この程度なら問題ないだろう。ヘイスケの血が濃いなんてうれしくらいだ。何も嫁など買わずに、はじめからソウ・ガブのペアに期待すれば良かったのだ。グリには独身貴族を気どつてもらおう。

…と、そのような結論に達したはずだったが、気がつくともたもや趣味のようにペットショップめぐりを始めていた。梅雨時の習慣となつていろいろらしい。グリだけ一羽というのはいかたうさうさだと、極めて珍しく財布に余裕があつた私は思いついてしまったのだ。

東奔西走。その行動範囲は居住する横浜市をはみ出て周辺市域にまで及んだが、コマ塩ばかりで眼鏡にかなつものがない。南武線のMN駅に行く。ここには馬まで売っているペットの総合卸会社がある。のぞくと、さすがに種類性別ごとに数十羽ずつもいる。しかしここは日曜日以外には小売りをしないという。最終手

段と考えておく。

京浜急行I駅が最寄り駅と思われるペットショップに行く。ここはヘイスケの嫁探しの際、オス・メス分けずに売っていて、腹を立てたところであったが、歩いていける範囲なので、期待せずに事のついでに寄ってみる。今回も値札はないが、感心にも「」「」「分けて売られている。」「マークのついた鳥カゴの中の二羽を見してみる。一羽は白い毛が多すぎ、なおかつ元気がないので除外。残りの二羽は基準内。ところがそのうち一羽がさえずっている。

『』というのメスを意味するマークだったと思うが、『』の方がメスマークだったかなあ。

しかし、「」のカゴの鳥たちもさえずっている。だんだんあいまいな気持ちになった私は、店主らしいアンちゃんに、「こっちのカゴがメスかどうか尋ねる。そうですとるので、さえずっているのがいると指摘してやる。アンちゃんはデヘ、と笑い、

「おととい入ったんですけど、いい加減なんですよね。」

と卸し元に責任を転嫁した。いい加減なのはお前だと思いつつ、適当に相槌をうつて、多分この店と本支店関係にあると思われるH駅の店(名前が同じ)と卸し元が一緒のためか、ナツに似ている。』を三五〇〇円で買う。

「文鳥は暑さに弱いんで、早く鳥カゴに移してください。」

などとアンちゃんが、デヘ・デヘと言つのを無視して帰路につく。道々、あの人間は完璧なボンクラのようだが、先天的な知恵遅れの可能性もあるので、いじめてはかわいそうかもしれないなどと考えていた。

家に着き二時間もすると粟玉などを食べた新入りはすっかりくつろぎ、気持ち良く澄んだ声のさえずりを披露してくれた。

そんな気がしていた私はまるで落胆せずに、夕闇の中、鳥カゴを振りながら再びペットショップに向かった。近いといっても、片道三〇分以上はかかるのだが、舌打ちの合唱をしている間に着いてしまった。店が閉まっていたら、たたき起してやるつもりだったが、まだ開いていた。オスである旨を告げ、

「ひどい卸しだね。」

とだけ言う。例のアンちゃんが、相変わらずデヘ、デヘしながら、

「取り替えましようか、換金ましようか。」

とうとうのび、

「換金してください。」

と冷たくはつきり申し渡す。本当は、

お前、卸しになめられてんだぜ、メスといわれた三羽のうち二羽がメスで笑ってられんのかよ、エー。

と激しく問い詰めたかったのだが、それでは親切過ぎるので言葉を飲み込んだ。デヘ・デヘは先に指摘したさえずりの一羽を別にしておらず、さらに返却したオス君も、「」のカゴに入れてしまった。一体何を考えているのだろうか。

## 【その十七】ソロ目の年の行動

私は藤沢市を歩いていて、横浜市の中心部から直線距離では二〇キロ程度離れるに過ぎない、いわゆる湘南のこの町も、横浜の隣接市町村の一つだが、横須賀線（通称スカ線）利用者だった私には、『鎌倉の隣』と言つイメージが強く、縁遠い。

実はここにくる前に、二十歳を前になくなった級友の墓参を、数年振りのゲリラ的突飛さで果たしていた。この墓は東海道線（地域名湘南電車）の藤沢のとなり駅、『辻堂』というところにもロートルなどところにあるのだが、どちらが本題か明確にわかるすばやさで線香を置き、藤沢で文鳥の嫁探しを始めたのであった。

この日は、藤沢、および鎌倉市の小鳥屋さんをしらみつぶしにする覚悟であった。鎌倉、江ノ島、辻堂、とくれば、烏帽子岩が見えるところまで行くのが、サザンオールスターズ（桑田佳祐）の世界観なのだが、そこまでは行かない。

「エボシ岩が見えってきた、俺の家も近い〜」

茅ヶ崎市民はそうなのだろうが、横浜市民の私は、烏帽子岩を見た途端、旅情を感じてしまうのである。

一、二軒冷やかしたあと、H本町の方へ歩いていく。もちろんこんなところに来た事はないので、住所標識を見ながらきわめて適当に歩いていく。迷い迷い行くと、人気のない国道のかなたに「小鳥屋」と書かれた看板が見えてきた。いや、看板と言うような立派なものではなく、板切れに適当に白ペンキを塗り、その上

に、きわめてぞんざいに、素人が赤ペンキで殴り書きした代物を、国道沿いの歩道に放置しているに過ぎなかった。

徐々に近づき、その場末の焼鳥屋のような看板の正体がわかってくると、私は、怖いもの見たさに足早になっていった。ほとんど近づくと、看板の前に店らしき建物は無い。ついに看板まで達して、歩道の右側を見ると、やや奥まったところに、よしづで覆われたバラックがあった。ひなびた浜のさびれきった海の家、『浜茶屋』と言った風情である。

はつきりとした扉も敷居もないので、どこからが店先でどこからが店内なのか、もあやふやなくらいだが、三方がよしづで覆われ、古びた鳥用具が端に積まれ、そこここに鳥カゴがつり下がっている店先に、文鳥はいない。そこで奥の、とりあえず屋根のある建物の中に踏み込む。当然のように薄暗く雑然とした店内には、いろいろな鳥がいたが、文鳥は、地べたに置かれた巨大で古びた鳥カゴの中に、白・桜・シナモンがすべて一緒に入れられている。

もちろんオスとメスの区別などなく、値札だってない。店内の最奥部の机の上で、この鳥屋のオヤジが何やら帳簿をつけている様子がなんとも怪しい。客が入ってきても見ようともしない。何やらズルあつかましげに、多分小さかきさと虚擬に満ちている（と勝手に想像する）帳面に向かっている。BGM?のAMラジオの音が、実にうるさい。

こういった素敵な雰囲気、鳥屋に、実は内心感心しきりなのだが、全く目に入らないと言った態度で、私は大カゴの中の文鳥をためつすがめつ、長々と見入っている。そのうち、上目づかいの様子をうかがっていたらしいオヤジが、座ったまま単発的に声をかけはじめてきた（なめきった接客態度だが、個人的には嫌いではない。いちいちまとわりつかれるよりましである）。

「何か目的はあるの。」

「桜文鳥が欲しいんです。」

少し愛想笑いを浮かべてみながら、間髪いれずに答える。

「色の濃いのか……。」

独り言のように言うオヤジ。知らん顔で文鳥を見つづける私。しばしの沈黙。

「何羽飼ってたの。」

「十……十二羽もいますね。今のは四代続いています。」



言葉遣いは丁寧な感じだが、明かに態度が大きい私は、「ここで文鳥にうるさいところを示しておこうと考えたのだ。今度は初めてこちらから話を切り出す。」

「メスが欲しいんだけど、見た目じゃわからないんですよね。」  
その瞬間、オヤジの目が光ったような気がした。

「簡単さ。フツ、と吹けばすぐわかる。」

何かつぼにはまったらしいと思った私は、即座に応じる。

「えっ、さえすらなくてもわかるんですか。この間もメスといわれて買ったらオスで、返したりしてるんですけど・・・。」

「そらあゝ、こっちはプロだもん。フツ、吹けばすぐわかる。さえすりゃ、誰だってわかるさ。こっちはフツと吹けばいいんだ。」

『プロ』のオヤジは、完全無欠のアマな客を前に勝ち誇っている。別に鳥を商品として扱うプロになる気はないので、その点はどうでも良かったが、「フツと吹く」性別鑑定など聞いたことがなかったため、私は正直驚いてしまった。

確かに、鳩の性別は肛門のかたちで判断するし、ヒヨコの肛門鑑定には免許だってある。小鳥とはいえ文鳥も鳥だから、肛門鑑定ができるのではないかと、以前ふと思ったことがあったが、実行してみたことはない。しかし「フツと吹く」のが肛門とは限らない。他にどこを・・・。

頭であれこれ考えながら、オヤジには疑惑の沈黙で応じた。アマな客の不信を



当時の居住区の様子

察したオヤジは次の手を打ってきた。

「プロだからな。そこを見てごらん。」

と言つて、壁際を見るようにあごをしゃくり加減につながす。そこには、安い額に入った古びた二枚の証書がかけられていた。とりあえず適当に見てあげる。愛玩動物なんかの、農林水産なんかの、何級とかなんとか書かれてあるようだった。オヤジは己がプロである証を、二枚の紙切れの中の権威に求めたわけだ。

ところが、私はあいにくそういつた紙に興味はなく、第一、頭の中は別の事で占められていた。何しろその「フツと吹く」というものの実演を見てみたいのだが、このオヤジの目が狂った場合、この遠隔の地（これも私の主観上の表現）まで、文鳥を連れてきて返却するのは、地獄なのだ。さらに重要なことには、鳥力ゴの中の数羽の桜文鳥のうち、私の眼鏡にかなうのは一羽だけなので、もしそれが実演の末に、オスと判断された時、

「そんじゃ、いらぬ、バイバイよ。」

と言えるかどうか。・・・多分その場に立てば言ってしまうのだろうが、それはなるべく避けたい。

いっこうに証書についての反応を示さずに、無言でまた文鳥を見始めた怪しい客に対して、オヤジは、

「桜は四〇〇〇円だよ。」

と、少しムツとした様子で言った。性別は関係ないらしい。何とアバウトで素敵な料金設定であろう。しかしマイナス要因が多すぎると、他にも見てまわる小鳥屋の当てがある私は、

「他も見て、また来ます。」

と、いかにも社交辞令の嘘八百丸出しに言い捨てて店を出る。「フツと吹く」を見てみたかったが、仕方あるまい。

## 【その十八】ソロ目の年の行動

「フツと吹く」プロの店を後にした私は、小田急線で片瀬海岸（有名な美しい江ノ島の対岸）まで行き、砂混じりの湘南海岸沿い（なんて言うとかっこいいのか



当時の集会の様子

もしれないが、そんな名前の海岸はないのだ。ここは砂混じり、塩混じりの風の吹く『片瀬西浜』に過ぎないのが現実である(を、そぞろ歩いたりしたが、その方面は期待はずれに終わり、夕方になつていたので帰宅した。

いい加減疲れたの

だが、翌日には鎌倉市街を歩いていた。

私にとって鎌倉は愛着のある場所だが、神社仏閣、古跡めぐりをした事はあつても、ペットショップに行った事はなかった。しかし電話帳で二件の目的地を検索しておいた。目的地は駅近くと少し遠く。

少し遠い方、駅前商店街のはずれにあるペットショップの桜文鳥は姿が良かった。入り口で水槽の掃除をしている、パリッと糊のきいたきれいな白シャツを着た品の良い白髪のおじさんが店主らしい。小鳥屋のおじさんというより、隠居の経済学部名誉教授といった印象だ。

桜文鳥は、それぞれ小さい鳥カゴに三ペア、キチン・キチン、といった様子で置かれていたが、残念ながら性別、および値段の表示はない。そこでくだんの老紳士に桜のメスが欲しい旨を伝える。老紳士は一番姿の良い文鳥たちが入れられている一つの鳥カゴに近づき、マジマジと、眼鏡を上げたり下げたりしながら見定めて、こちらがメスだとおっしゃる。

その様子を見て、私は一抹の、いや一〇〇%の不安に満たされたが、指摘された文鳥自体は気に入った。ちょっと角張った感じの顔つきで、脚も太いが、どこか上品だ。それに私には数日後また鎌倉に来る予定があつた。もしオスであつても、その時返却すればいい。

かなり乗り気になって、今度はいつの生まれか訊いてみる。生真面目な老紳士



はしばしの考慮時間に入った後、

「 昨年の春だと思えます。」

とお答えになる。わざわざ「思う」「とつける」ところに誠実さがにじんでいる。続いて、老紳士は私が飼っている文鳥が何月生まれかお尋ねになるので、去年の秋生まれの旨い返答申し上げる。しばし沈黙……。

通常文鳥のペアリングでは、オスが少し年長の方がうまくいくとされているので、半年の姉さん女房は少し問題とも言えた。さらに頭に文鳥飼育マニュアルが搭載されている私にとって（ 某飼育書の中身が入っているというだけの意味）、「春生まれは体が弱い」という文句も思い出される。

それでも、値段によっては買ってしまうつもりで、お尋ねする。老紳士はまたしても考慮時間に入り、さらに帳面を取り出すと静かにめくり始めた。

「…四五〇〇円……。メスの方が高くなってしまいますね。」

と丁寧なご回答。これもずいぶん前に作った授業ノートの文字を、完璧に黒板に再現しようとする大学教授を思わせる。

それにしても四五〇〇円。高すぎはしない。五八〇〇円などというところもあるのだ。しかし安くもない。三五〇〇円のところもあるのだ。数日後にまた来る予定なので、それまで他を探して、見つからなければその時に買うことにする。

「また参りますので。」

と、丁寧に老紳士に挨拶して、駅に戻った。

## 【その十九】ソロ目の年の行動

老紳士のお店を後にした私は、鎌倉駅にひしめく遠足や修学旅行の児童、生徒、学生、および団体のおジジ・おババを、煙たくにらみかき分けつつ、スカ線で大船に行く。ここも一応鎌倉市域だが、こちらには闇市場のようなごちゃごちゃと入り組んだ繁華な商店街があり、断然日常生活のパワーに満ちている。

何軒かあるペットショップを冷やかしてまわり、最後に商店街のはずれにある〇鳥獣店というところにやってきた。ここは店先の柵に整然と鳥カゴが並べられており、その中の一つに桜文鳥が六羽ほど入っている。さらに値段も貼られてい

て、

「オス3500円・メス4000円」

とある。何ら問題なし。しかし、残念なことにとれがメスなのかわからない。ジューと観察する。

みな、脚が太くつやも良い。健康で丈夫そう、この点では問題なさそう。ゴマ塩傾向のあるグリの嫁としては、色は濃い方が個人的な趣味の上で望ましいのだが、その点二羽は少し白い毛が多すぎた。それでも残る四羽のうち二羽はポーターライン、二羽がとても望ましい文鳥であった。それに、どの文鳥も目がまん丸ではなく、頭も扁平さみ、全体的な雰囲気は我が家のヘイスケに似ており、実に私のタイプの顔立ちをしている。

色の濃い鳥がメスなら文句なしだ。私は店員のおネさん、髪を染め、ピアスをし、美容師然としたその人に、桜のメスが欲しい旨を伝える。おネさんは桜文鳥のカゴを引き出しながら、オスを飼っているのかと訊くのうなずく。

「脚環をしているのがメスなんですけど、今、一羽しかいませんね。」

うかつにも気がつかなかったが、確かにポーターラインと判断した一羽が脚環をしている。その一羽を良く見る。我が家のクルに似ている。死んでしまったク口にはさらに似ていて、ほっぺたが膨らんでいる。体はあまり大きくないが、血色が良く、クチバシがつややかで、さらに脚が太い。少し白い毛が多いが、その点は妥協することにする。

とりあえず、いつの生まれか訊いてみる。

「この子達は、この間（お店に）入ったばかり、去年の秋、一年たっていないです。」

「それをください。」

間髪がない。このへんの判断は軽率なくらいに早いようだが、本当はしっかりといろいろ考えている。

目がまん丸なのは、先天的なものだけではなく環境にもよるものだろう。その証拠に我が家のブレイなどは、買った当初、まん丸の目をしていたが、徐々に目じりが細くなっていった。おそらくこれは陽があたらない店内から、陽のあたる環境に移った結果に違いない。文鳥を一日中ひなたにさらすのは危険だが、日陰暮らしが体にいいはずがない。大概のペットショップの文鳥が丸目で、クチバ



やって来た当初のフネ

シの色が薄いのは日光浴の不足の証明で感心出来ない。となる  
と、「この店の文鳥は、  
程よく日差しを浴び  
て健康な生活をして  
いたのが、その目と、  
クチバシに現れてい  
ることになる。さらに  
脚の太さは、体質の丈  
夫さをも物語ってく  
れる。しかも見ていた  
限り、他の文鳥にいじ  
められるような、性格

的にいじけた鳥でもなさそうだ。そして決定的なのは、「この子」と店員が表現した事であろう。オジさんなどがこの表現を使った場合、首をしめたくなるが、女性が言うと、文鳥を商売動物と考えず、生物として接しているような好印象を受ける。

ざっとこんな事を、一羽の文鳥の購入にあたって考えていたのだ。

店員のおネさんは、返事の早さにかえって「この子」の将来が不安になったらしく、文鳥は気が荒いので大丈夫だろうかと心配しだした。暗に、見合いを勧めているのかもしれないが、それについて私は無用論者だから、

「大丈夫だと思います。」

と、推量形にしては断定的な言いきり方をする。何を言っても無駄と了解したおネさんは、その紅一点の文鳥を捕まえ箱に入れる。会計。消費税なしのジャスト四〇〇〇円。実に素晴らしい。けなす余地がなくて残念なくらいだ。

【その二十】生産ラインは五つ+

一九九九年秋の繁殖シーズンを前に私はまた悩んでいた。四世代五つのペア。さらに三羽の独身姉妹。これがフル稼働したらどうなるのか。おそらく春までに一〇〇羽以上に増えてしまう。とりあえず代重ねが継続されれば良いので、五代目となるはずの卵以外は、孵化させる必要はない。しかし産卵できないように巢を取り除くのは今までの習慣と、環境（ペア飼育と寒さ）から感心しない。また産むだけ産ませて擬卵とすりかえることにする。ともあれ擬卵を豊富に用意しておかなければなるまい。

またも非常にふざけた残暑が続いていたが、二十個以上の擬卵を手にした私は、九月の中旬に箱巢を五つ設置した。実に壮観。ブレイは待つてましたとばかり、巢草をせつせと運び、続いてヘイスケとサムも巢作りにいそしむ。まだ生後一年未満の四代目ガブも、生意気に巢材を運んでいる。しかしいっぺんに全部持つていこうと欲張ってこんがらがっている。奴はどこまでも祖父のブレイに似ている。同じ四代目でもグリは父のサム同様、巢材のヤシの毛を一本一本丁寧に運んでいる。サムの場合、あまりに慎重で丁寧すぎるので、じれったく思った妻のクルが出てきて束で箱巢に運び込み、

「あんだ、トロくさいのよ。」

といった様子で夫をにらんでいたりするが、グリは妻であるフネ（大船で購入したので『フネ』とした。どこまでも安易なのだ）は巢作りの意味がわからないようで、面白そうに見ているだけ。グリは芸術家さながら、一本の繊維をクチバシにくわえて、いちいち置き場所を考えている。この二羽が卵を産むのは先のことになりそうだ。

ふざけきつた暑さがさらに続いていたが、そんなことは問題とせず、九月二十九日にチビが産卵開始。計四つ（一つは箱巢外で割れてしまっていた）、即刻、擬卵に替える。

四季の存在が疑わしいくらい暑さが続いていた十月上旬、いよいよ他の三つの生産ラインも稼働した。五日クル産卵開始。六日ナツとソウが産卵開始。

まさかソウがこんなに早く出産するとは思わなかったが、さすがにブレイ似だけあって夫のガブは早熟だった。この卵は後継ぎ候補だが、卵が産まれても、夜



子育ての天才主夫サム

な夜な手乗りの両親は遊びまわると思っただので、この際育児の天才、良夫賢父のインドア鳥、サム君に仮母になってもらうことにした。彼に任せておけば、有精卵である限り確実に孵し育ててくれるはずだった。

本来私の主義では、

無理せず子育ての自覚が出来るまで待つのが本当で(チビなどは、夜も一歩も出ず卵を温めるようになった)、第一、もう十分に数がいるので、あわてて後継ぎを生ませる必要も感じていなかった。ところが、この時は何とヒナを譲ってほしいという奇特な人物がいたので、多少の無理を実行することにしたのだった。

そのカモ、いや御仁は私の大学時代のパシリ、いや親友のE君。母上が昔文鳥を飼っていて、また欲しくなったと言っ。息子はアンボンタンだが、母上は立派な方のような。二、三羽とか言っていたが、彼は市民楽団なんかで『ラッパ』を吹いており、顔は広いはずなので、ガブ・ソウの仔で、気に入った一羽を後継ぎとして残して、残りは四羽でも五羽でもみんな彼に押し付けることに、私は一方的に決めてしまっていた。男の友情とはそういうものである。

八日、一日一個とすると卵は三つのはずだが、ソウの箱巢を留守にのぞくと二つしかなかった。サムのところには四つあり、すでに彼は温め始めていた。卵をすり替えることにする。まぎれないようにソウの卵に墨で小さく印をつけ擬卵二つを加えて、クルの卵は処分した。そして、

「サムよ、人間のジジ・ババ(祖父母)も、息子や娘から孫を押し付けられ育てることは多いのだ。君もがんばりたまえ。」

と言いわした。

クルの産んだ卵は、やたらと立派だが、ソウの卵はずいぶん小さい。初産のためか。しかし母(ナツ)の卵も小さいから体質なのかもしれない。さらに産み方



が少し不自然で、十月十日によやく四つ目を産卵、温め始めた。中休みがあったらしい。後から産んだ卵もサム君にお願いする。クルの五つ目の立派な卵があったが情け容赦なく捨ててしまふ。

そのうち感心なことに、ソウは夜遊びせず、箱巢にこもって卵を温め出した。これはヘイスケの遺伝だろう。立派だ。そのヘイスケとナツの夫婦は、夜は二十分ずつ交代で遊びと抱卵を交互に行っている。こうなると、もはや人間でも真似できないほどに偉大だ。これに比べて、ブレイとガブときたら遊びまわって帰らない。ごくたまにブレイは帰ろうとするのだが、良妻賢母のチビに、

「あんたは遊んでいいわ。当てになんないし。」

と、冷たく言われて交代してもらえないらしい。信用がないのだ。良く似た孫のガブのほうは、まだ若僧で自覚がなく、何でソウと一緒に遊んでくれないのか良くわかっていない様子だ。

さて十一日にソウ・ガブの箱巢をのぞいて四つそのままなので、打ち止めと油断していたら、十四日に二つ増えていた。この卵は前の卵に比べて格段に大きくて立派だ。ソウは妙な産卵行動をとるようだ（初産なので何ら不思議ではない。当時の行動はあわてすぎと言える）。夫のガブの方の育児能力が怪しいのでやはり擬卵と取り替える。そして、二つの卵もサムに任せると、孵化日にかなりずれが生じるので、今度は母方の実家（ヘイスケ・ナツ）に任せることにした。

### 【その二十一】ひ孫の子供は玄孫（やしやい）

五代目の孵化予定日は十月二十四日、二十六日、二十八日だったが、予定日を過ぎても箱巢からヒナの鳴き声は聞こえなかった。毎日耳をすましながら、私はやはりソウとガブでは繁殖は早かったかと思いつつジリジリしていた。二十八日、何となくヒナが産まれた気配があるので（このへんは勘）、思いきって、夜サムたちの箱巢をのぞいてみる事にする。

温めているサムに敬意を払いつつも割り箸で押しつける。そこには一つの芋虫三つの卵、ヘイスケに玄孫（ヤシャゴ）が生まれた。これは三つ目か、四つ目の卵が少し遅れて孵化したものだったようだ。それにしても一羽しか孵らないとな

ると、しっかりと子育てしてくれるかが問題となる。チビとブレイがクルを産んだ時は、ろくに餌をやらずに閉口したではないか。とにかくインドアな主夫のがみ、サム様に任せる他になかった。

三十日夜、ヘイスケとナツのところものぞいてみる。こちらは預けた二つともが孵っていた。芋虫二つ。ヘイスケは人間にのぞかれることよりも、箱巢に誰もいなくなるということが許せないらしい様子なので、すぐにナツを帰して素知らぬ顔をする。様子をつかがっていたヘイスケはすぐにカゴに飛んでいくが、ナツがカゴの中にいるのでとりあえずOKらしい。ガサガサと買物ビニールの音をたてたら、なにかもらえると思ってこっちに飛んできた。

ヘイスケはどうも文鳥ばなれした『思考法』をしている気配があり、奇怪な行動をする。考えてみれば、この前日の夜から箱巢の中で就寝しなくなっていた。昨年と同じような行動をとっていたから、ヒナとは一緒に寝ない主義らしい。夜泣きが嫌なのだろうか。あれだけ抱卵にも育児にも熱心なのに妙な話だ。

文鳥がどの程度論理立てて物事が考えられるか知らないし、あんまり考えているようには思えないが、ヘイスケとマセだけは、何か『思考』して『判断』したうえで妙な行動をしている気がしてならない。考えてみればヒナの時からこの二羽は、

「へっ、お前が飼い主か。」

といった顔で人を見ていた。先天的にどこかおかしいのかもしれない。それはそれで、実に素晴らしい。ぜひ五世たちにも遺伝して欲しい。

十一月一日の夜、箱巢から孵化しなかった卵と擬卵を取り出した。心配したがさすがサム様、ヒナが一羽でも立派に育児し、数日にして倍の大きさにしていた。それにしても三つあるはずの孵化しなかった卵が二つしかない。どこかに落ちたのか、詮索するひまはないので二つをすばやく取りだし、すぐにサム様にはお帰り頂く。変色している二つの卵を割ってみると一つは無精卵（未受精卵）、一つは中止卵（成長途中に何らかの理由で卵の中でヒナが死んでしまった卵）だった。

はじめの四つに無精卵と中止卵と、孵化したものがあつた（一つ行方不明）のに対し、後から産んだ二つは共に有精卵で孵化した。この結果と、さらに産卵のばらつき、および後の二つの卵は前のもの比べて大きかったことから推して、



五代目たちの姿

多分産み始めの二つの卵は未受精で、いわば想像妊娠、中ほどの二つは受精しているものの、まだホルモンか何かの関係で体が産卵出来る状態になかった卵、最後の二つになって始めて産体制が整ったものと勝手に判断する。

などともうでも良いことだが、この考えが正しいとする、サムが育てているヒナが心配になってしま

うではないか。しかし、数日で見違えるばかりに成長させたサム様が後天的に力バーしてくれるものと信じる以外にない。

それにしても、三羽なら、一羽後継ぎに残して二羽譲れる。わざとらしく思えるくらいに都合良くいった。田舎の行いが良いからだろう。きっと。

### 【その二十一】ムッドマザーの呪縛

心配するまでもなかった。生後約二週間、当然のように順調に大きくなった五世たちを、いつものように人間が引き受け、当然のように生後約一ヶ月で飛びまわるまでに育てあげた。この家の文鳥たちも人間もヒナを育てる能力は抜群なのかもしれない（人間の方はたいしたことはない）。

五世たちの内、サムが育ててくれたヒナは、頬が白く、クチバシの根元に白い斑点模様があった。そこで『テン』と呼ぶことにした。ヘイスケが育ててくれた



後継者として一羽残ったゴン

(どう見ても妻のナツよりも子育てに熱心だったのでこのように表現している)二羽のうち、一日生まれが早いらしいのは丸々としているので『マル』とした。このヒナも桜文鳥のヒナにしては頬が白い。両親は濃い灰色の完全無欠の桜のヒナの毛並みだったのに(父

のガブの方はクチバシの根元が黄色がかったので、「完全無欠」とは言えない)、なぜこれほど白い形質がでたのだろうか。

桜文鳥至上主義の私は考え込み、すぐにある文鳥の姿が思い浮かんだ。

これはフクの呪縛に違いない。

きつと母方の曾々祖母にあたる白文鳥のフクの遺伝因子のなせる技に相違ないと思っただ。

「あんだ、私のことを忘れようと思ったって、そうはいかないわよ!」

そう言えば、何とか色を濃くしようとしたくらむ私の行動は、フクの血をかき消そうとしているようなものだから、彼女の血がそれに反抗したのかもしれない。

白いゴッドマザーのことを忘れ去ろうとするつもりはなかったが、当然私が三羽のうち家に残すことに決めた末っ子は、唯一完璧に真っ黒なヒナだった。フクの呪縛に屈する気もないのである。一目見て、一羽だけ完全に桜となりそうなので、すぐに後継ぎに決めて『ゴン』と名づけていた。五代目だからゴン……、相変わらず安易だ。

成長してきて性格が見えてくると、テンは最も利発だったし、マルは体質が一番丈夫そうで姿もかわいらしかった。その点、ゴンは末っ子のためか少しのろまに見え、黒いのは良いとしても、ツメまで黒ずんでいて、少し色素異常の疑いも

抱かせた（事例の多い話で心配はいらないようだ）。しかし桜文鳥至上主義の信念が揺らぐことはなく、十一月末、ほぼ自分で餌を食べられるようになったにテンとマルは、多摩川園という読売ジャイアンツの練習グラウンドが近くにあって口トトルな駅でT君に渡した。

これでゴンはひとりっ子状態。もうベタベタに甘やかしていたら、十二月二十日、どこかでヒナの声がする。

そんなはずは……。

ソウ・ガブにまたもヒナが生まれていた。

これは油断だった。もうヒナは一羽もいらないので、産んだ卵は片っ端から回収して擬卵と取り替えていたのだが、忙しにかまけて、一つだけ見逃してしまったのだ。二・三週間前にソウから六個の卵を回収して安心していたが、その後一つ産み足したのである。不規則な産卵をする鳥だと気づいていたのにこの始末だ。

しかしヒナは一羽、両親は手乗り、しかも育児ははじめて（前の三羽は仮母）。これだけ悪条件が重なって成長するものかと半信半疑だったが、さすが血筋は争えない、ソウのみかガブも交代で育児に参加し、あっさり大きくしてくれた。二〇〇〇年の正月の始めには引き取らなければならない。うれしいような悲しいような。

### 【その二十三】五代目ゴンはハーフか

二〇〇〇年、新たな千年紀を迎えて三ヶ月が経とうとしている。

思いがけず誕生したガブとソウの子供は、『オマケ』と名づけた。体は小さく、桜のヒナのはずだが頬が白く鼻の根元に白い斑点模様がある。ヒナの時から前例にないくらいに大きな声で餌をせがんでいたが、飛び回るようになってからは、なかなか乱暴で、兄（姉？）のゴンを圧倒気味であった。

このオマケは近所に住んでいる姉夫婦の元に養子に出した。まだ羽が生え変わっていないが、グチュグチュとさえずりの練習にはげんでいるらしい。オスだったのだ。





自分の姿に見惚れているゴン

問題は我が家のゴン。生後五ヶ月、ヒナ毛も抜けて我が家では最も美しい容姿の桜文鳥となり、小型回転鏡を回す芸もこなし、手の中で眠り、完全にえこひいきされる存在だが、性別はいまだ不明。オスならすでにさえずっているはずだがその様子はない。メスなら『ゴン』では色気がないので『ナゴン』もしくは『ゴンナ』と呼ぼうと

思っていたが、頭も体も大きく、三姉妹の一羽ハンをつけ回したりする様子は完全にオスで『ナゴン』といった風情はない。

父方の祖父のサムがさえずると、『ビッ、ビッ！』と大きな声を出しているので、どうもそのままをしたららしい。普通グチュグチュとぐぜりながら、文鳥のオスは自分のさえずりの形を整えていくものだが、その段階を省略しようというのかもしれない。器用なのか不器用なのか・・・。

メスの疑いを持たせる要素も、ハンの追っかけのみではない。例えばプレイとガブに言い寄りられたりしている。しかし、プレイは動くものなら（場合によっては動かないものでも）何に対してもさえずって迫っていく奴で、過去にヘイスケに交尾しようとしたこともあった。ガブもそのプレイの血をやたら受け継いでいる孫である。その行動は全く当てにならない。

文鳥に性同一性障害（身体と精神の性が別）はないだろうから、十中八九『さえずらないオス』と思うが、とりあえずニューハーフということにして、繁殖の期待をかけないことにする。すでに五代まで続き十四羽にふくれあがっているの

で、慌てて六代目を目指すことはない。一年間は様子を見てから考えても遅くはないだろう。

前の文鳥の系統は、五代目の超近親の白文鳥コボ（親が兄妹）に問題があり断絶してしまったが、今回は初代のヘイスケすらまだ健在でメスを追っかけているのだから、系統断絶の危険はまだない。

考えてみたら、前の文鳥の系統と全く同じ経過をたどっていることに気づく。初代に嫁、二代目、三代目に婿を迎えたのも同じなら、四代目は同族の夫婦で、五代目がオスの生殖異常の疑いがあるところまで同じだ。しかし私は運命論者ではないし、歴史は繰り返すことなどあるわけがないと思っているので、家系を断絶させる気はない。四代目は二系統あってまだ二歳未満。五代目はゴン以外に三羽いる。とにかくあわてることはない。

我が家にはもつたいたないくらいの容姿ながら、疑惑につつまれたゴンを見ながら、私の心はとりあえず落ち着いていられるのだった。

#### 【その二十四】養子鳥オマケの里帰り

二〇〇〇年五月某日、動物のカワウソに似た姪と、アニメのピカチュウに似た姪がやってきた。これはいつものことだ。お気軽アホ主婦の私の姉は、昨年来近所に住みつき、何かというところの偏食ちびどもを押し付けてくる。自分よりはるかに家事がうまい弟を利用してようというわけだ。苦々しい。

どうでも良いことだが、姉のカワウソは、ハンバーガーとかピザとかが好きという現代のお子様のな嗜好であるのに対し、妹のピカチュウはキュウリときざみネギが好きという変わりだねのベジタリアンだったりする。どうして同じ物を食っているはずの姉妹なのにこうなるのか。わずらわしい。

せっかく近くにいたので、養子にやっていたオマケも姪たちと一緒に連れ出した。姉の家は散らかり過ぎていて気分が悪くなるので、数ヶ月見に行かなかつたが、その間、ヒナ毛が生えかわったとか、さえずりだしたといった情報を得ていて、気にはなっていたのだ。

姉宅の玄関でオマケの鳥カゴを受け取り、「どっかで見たような」という顔を

しているオマケを家に持ち帰り、早速出してやる。

彼は、ほとんど戸惑うことなく、飛び、まわりついてくる。育ての親を忘れることはなかったようだ。賢くかわいい奴だ。容姿は兄のゴンにはまるで劣っているし似てもいないが、立派な桜文鳥で、ゴンより我が家の文鳥の諸要素を含んでいて親近感がわく。

体が小ぶりで、ほっぺたの白斑の端に茶褐色の混毛があるのはヘイスケ的、少し白い差し毛があるのはフクの影響、目の上の羽毛が盛り上がりうかがうような目つきなのは父のガブ似、人の皮膚をつねるように噛むのは母のソウの癖を倍化させたもので、さえずりは祖父のフレイそのものだったりする。

遺伝的影響に感心しながら右手に乗せ、左手を広げる。

「オマ、オマケー！」

「チヨーン！」

返事をしながら左手に飛び移る。

「オマ、オマー！」

「チヨーン！」

右手に飛び移る。何回でもやる。姉宅では噛みつく凶暴文鳥とみなされているようだが、愛情過多、人間ベタベタの『ベタ文』なのだった。

児童の姪力ワウソに、こんな芸をするのだと見せてやったら、噛まれないように手を握りながら目を丸くしている(園児のピカチュウの方はオマケに近づきもしない)人間の小僧にはこの愛情過多の小動物を扱えないのであった。何ともしない話ではないか。

『ベタ文』であるオマケの本質を見るために、原色こちゃ混ぜ服のため鳥カゴに近づくの私から禁じられたカワウソを前にして(我が家の文鳥は原色系の服を見なければならないのでパニックになってしまっが、オマケは見なれているので平気)これ見よがしにベタベタ遊ぶ、クチバシをつまむ、手の中に包み込む、尻尾を引っ張る。尻尾に触ることは箱入りのゴンも嫌がるが、オマケは平気。気づけばまた両手反復飛びだ。

完全に私は『小鳥使い』の大道芸人のような気分になったが、せっかくだから一緒に育った兄とも遊ばせてやるつもりと思い、ゴンも出してやる。・・・これはダメだった。独占欲の強いオマケはゴンが人間に近づくことすら許さず、追い掛け

回し、ゴンは恐怖で逃げ惑うばかりだ。何とぶがいない兄貴であるうか。舌打ちしたものの、かわいそうなのでゴンはカゴに戻す。

二人の姪は夕方迎えに来たアホ姉に渡したが、『ベタ文』のオマケは一泊させることにした。「お泊まり」と聞いて勘違いした天然ボケ傾向のカワウソは喜んでいたが、もちろん人間の子どもには用はない。お菓子でお引き取りいただく。

夜の八時、夜遊びの時間、十四羽とオマケを一斉に放す。どうなるものかと思っていると、オマケは手当たり次第に他の文鳥たちを追い掛け回し始めた。特に人間に近づくの許さない。ずいぶんと生意気な奴である。しかし私は静観を決めこみ、我が家の文鳥連も見なれない奴を遠巻きにして、反撃をしないでいる。

文鳥は人間と同じで顔だか容姿でも個体識別をする。たまに顔の似た文鳥を見間違えたりするくらいだ。オマケは昼間からうろついていたので、はじめから警戒対象になっていたのだろう。私としては、さえずりがブレイそのものだからヒナの時に覚えていて後から思い出して真似たようだ、つまり格好良く言うといードバックだ。色情過多でメスに迫ったりするのかと思っていたのだが、その辺は淡泊どころか理不尽につき払うだけだった。



こぶしを握った姪にしがみつくオマケ

相手は十四羽、いちいち追いかけては体力がもたない。さらに、たかが新入り的小僧と見定めたヘイスケ・ブレイ・ガブ・グーリといったおとなのオスたちが反撃をするようになり、三十分後にはオマケも人間の独占をあきらめ、静かにせざるをえなくなった。これこそ集団生活の仁義、掟という

ものであろう。

翌日、集団生活を再認識したオマケは、姉の家に戻っていった。

カワウソとピカチュウと仲良くしてくれば良いが・・・やはりたまには実家(我が家)に連れてきてやるのが、彼の精神的健康に不可欠なような気がした。

つづく